外　国　語

1　学習指導と評価における課題

～平成27年度「北海道高等学校学力向上推進事業」学力テスト等の分析結果と指導上の改善点～

(1) 学力テスト等の概要

ア　対象科目、学年

学力テストの問題は、学習指導要領の内容を踏まえ、「北海道高等学校学力向上推進事業」推進校及び協力校の協力のもと作成し、道内の高等学校第１学年を対象に、「コミュニケーション英語Ⅰ」の内容について実施した。各学校は、自校の生徒の状況に応じて、コアアビリティ（Ｃモデル）、ベーシック（Ｂモデル）、アドバンスト（Ａモデル）の３つのモデルから選択して実施した。

イ　「コミュニケーション英語Ⅰ」における領域別の正答率等の比較

全道の状況の概要は、昨年度と同様、「書くこと」及び「話すこと」については、「聞くこと」や「読むこと」に比べ、期待正答率を大きく下回る結果となった。（Ｃモデル及びＡモデルについては、「話すこと」に関する設問を設定していない。）

また、「書くこと」における無回答率が、平成26年度及び27年度において、Ｂモデルが20％以上、Ｃモデルが10％以上であり、課題が見られる。指導に当たっては、生徒の習熟の程度に応じた表現を用いることを促したり、適切な分量を設定するなどの配慮が必要である。

【学力テスト（英語）全道の状況の概要】

学力テスト	平成26年度				平成27年度			
Ｃモデル	期待正答率	正答率	中間得点者率	無回答率	期待正答率	正答率	中間得点者率	無回答率
聞くこと	76.5%	76.3%		1.7%	76.5%	77.4%		1.5%
読むこと	69.5%	58.2%		3.6%	69.5%	60.4%		3.0%
書くこと	70.0%	23.2%	9.3%	12.3%	70.0%	25.3%	10.6%	11.8%

学力テスト	平成26年度				平成27年度			
Ｂモデル	期待正答率	正答率	中間得点者率	無回答率	期待正答率	正答率	中間得点者率	無回答率
聞くこと	70.0%	69.6%		0.2%	70.0%	70.0%		2.8%
読むこと	70.0%	49.9%		7.0%	70.0%	50.6%		9.3%
書くこと	60.0%	1.9%	24.6%	22.5%	60.0%	3.1%	38.0%	26.2%
話すこと	70.0%	20.4%	63.4%	0.1%	70.0%	26.5%	65.8%	4.9%

学力テスト	平成26年度				平成27年度			
Ａモデル	期待正答率	正答率	中間得点者率	無回答率	期待正答率	正答率	中間得点者率	無回答率
聞くこと	65.0%	57.6%		0.8%	65.0%	59.4%		0.1%
書くこと	60.0%	18.9%	63.9%	4.6%	60.0%	15.6%	71.0%	6.5%

ウ　北海道高等学校学習状況等調査の結果について

調査項目の「英語の勉強は好きだ」、「英語の授業の内容はよく分かる」において、「どちらかと言えばそう思わない」及び「そう思わない」と回答している生徒の割合は、平成26年度及び27年度とも50％前後である。教師は、生徒の外国語学習に対する

関心や意欲を高め、外国語で発信しうる内容の充実を図るなどの観点を踏まえた授業改善を図る必要がある。

【北海道高等学校学習状況等調査から】

○「英語の勉強は好きだ」（全道）

年度	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない
平成27年度	20.1%	30.2%	30.2%	19.5%
平成26年度	19.1%	28.7%	30.5%	21.7%

○「英語の授業の内容はよく分かる」（全道）

年度	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない
平成27年度	18.4%	42.3%	27.9%	11.4%
平成26年度	17.6%	40.9%	28.7%	12.8%

(2) 「話すこと」、「書くこと」の指導上の工夫・改善

(1)で見たように、４技能のうち、特に「話すこと」、「書くこと」については課題が見られる。課題の解決に向け、次のような工夫等が考えられる。

「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定とその活用

＜　話すこと　＞

・現行の学習指導要領においては、「話すこと」に係る言語活動や配慮事項が他の技能と比べて多くなっていることから、各項目を羅列するのではなく、例えば、「話す内容」、「話し方」、「表現」など内容に応じてグループに整理するなどの工夫が考えられる。

・学習指導要領に示されている「情報や考えなどをまとめ、発表する」などの指導内容を「CAN-DO リスト」に記述する際には、「グラフや図表などを適切に利用する」など具体的な言語活動を入れることで、学習到達目標をより明確に示すことができる。

＜　書くこと　＞

・「書くこと」に関わってどのような力を育成すべきかを計画するに当たり、学習到達目標を「書く内容」、「書き方等」、「表現」という小項目に分ける工夫が考えられる。

・生徒が書く英語の正確さのみに目が奪われないよう、初期段階で英語を書こうとする意欲や、英語を書いて読み手に自分の思いや考えを伝えたいという気持ちを持たせることが重要であることから、生徒の関心が高い事項について、短い英文でも構わないので書くことを日常化させるなどの工夫が考えられる。

評価の工夫・改善

＜　話すこと　＞

・「話すこと」の能力は、実際に話すことを通して育成するので、発表、グループでの話合い等の多様な活動の場面を通して評価する必要がある。

・生徒による自己評価や生徒同士の相互評価を活用するなどの工夫も考えられる。

・評価の信頼性を確保するため、インタビューテストを録音（録画）することも効果的である。

＜　書くこと　＞

・授業での言語活動において、複数回にわたり、指導した内容に対する生徒一人一人の取組状況を評価する。

・生徒の取組状況や関心・意欲・態度の変化について、よりよく理解するため、授業中の観察だけではなくワークシートやポートフォリオ等を活用し評価する。

・授業等において、語彙、文法、語法等に係る知識を活用して、エッセー等のまとまった文章を書かせ、評価する。

言語活動の工夫・改善

＜　話すこと　＞

・事前に練習したり、話す内容を暗記したりする活動ばかりではなく、即興で話す場面も設定し、不十分であっても自分の意図を相手に伝えることに慣れさせることが重要である。
・生徒同士のコミュニケーションが円滑に進められるよう、相手の発言を促したり聞き直したり話題を発展させたりする際に必要な表現を段階的に指導し、教師も生徒とのコミュニケーションにおいて積極的にそれらの表現を使用するなど、モデルを生徒に提示することが重要である。

＜　書くこと　＞

・英語でまとまりのある文章を書くことに慣れていない生徒に対し、何をどのように書けばよいか指導する必要があることから、アイディアを生み出したり膨らませたりするため、生徒にブレーンストーミングをさせたり、ペアで問いかけを行わせたりするなどの指導の工夫が考えられる。
・目的に応じて、書く際のポイントを教師があらかじめ具体的に提示するなど、活動を円滑に進めるための配慮が必要である。例えば、論説の場合は、論旨が首尾一貫しているか、主張が十分サポートされているか、つながりを表す語句は適切に使用されているかなどの観点を挙げておく必要がある。

2　育成すべき資質・能力を踏まえた学習指導・評価の改善・充実

(1)　４技能のバランスのとれた育成

外国語の目標はコミュニケーション能力を養うことであり、この目標を達成するためには、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の４技能を総合的に育成するための統合的な指導を行うことが大切である。コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報や考えなどを、外国語で聞いたり読んだりして的確に理解したり、外国語を話したり書いたりして適切に表現し伝え合う力の育成が求められており、そのための学習過程の改善・充実を図る必要がある。

(2)　評価の観点の在り方

各学校で設定した目標に準拠した観点別学習状況の評価を行うに当たっては、「外国語を用いて何ができるようになるか」という観点から単元全体を見通した上で、授業の中で育成を目指す技能やその活用方法について重点化して指導し、単元目標と年間の到達目標が有機的につながるように、４技能を全ての観点から総合的に評価することが求められる。また、平成28年８月に、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会により公表された「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」では、外国語教育における「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質・能力を育成することを目標とすることが示されており、これらの資質・能力を踏まえた評価が求められる。

(3)　「話すこと」、「書くこと」を統合した指導を行う単元計画の具体例

次に、「コミュニケーション英語Ⅰ」の単元計画の例を示す。この例では、主体的な話合いを取り入れるなど「アクティブ・ラーニング」の視点を踏まえるとともに、「書くこと」、「話すこと」を重点的に評価する場面を設定している。

1　単元名　　Young Japanese in Ghana

2　単元の目標

ア　ペア・ワークにおいて、互いに協力しながら会話を続けようとする態度を身に付けさせる。
イ　人物についての説明を読んで、その内容を口頭で要約する力を身に付けさせる。
ウ　読んだことに基づき、自分の街の活性化について、自分の意見をまとめて発表する力を身に付けさせる。
エ　自分の考えや気持ちを伝える表現（hope[that]S’＋V’～など）の使い方を理解させる。

3　単元の指導に当たっての考え方

本単元は、アフリカのガーナ共和国を訪れた日本人が、現地の人たちと触れ合いながら、学校を修繕して教育環境を改善したり、パイナップル畑を造園したりするなどして、地域の活性化に貢献したという話題を題材としている。

少子高齢化や地域の活性化等の社会的な話題について、自分自身の考えやその理由をグループで伝え合う能力を育成する。

単元の評価規準を単元の目標と対応させる。

4　単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
ペア・ワークにおいて、互いに協力しながら会話を続けようとする。	①人物についての説明を読んで、その内容を口頭で要約することができる。 ②読んだことに基づき、自分が住む地域の活性化について、グループで意見をまとめて発表することができる。	（本単元では評価しない）	自分の考えや気持ちを伝える表現（hope[that]S’＋V’～など）の使い方を理解している。

本単元では、「外国語表現の能力」を重点に評価している。（「話すこと」、「書くこと」）

5　指導と評価の計画（９時間）

時間	ねらい、学習活動、指導上の留意点	単元の評価規準	評価方法
1	[ねらい] ・キーワードなどを手がかりにして本文の概要を捉える。 [学習活動] ○　教師のオーラル・イントロダクションを聞いたり教師からの質問に答えたりするなどして、単元の内容についての背景となる知識（スキーマ）を深める。	関・意・態	活動の観察
2 ～ 5	[ねらい] ・各セクション（§１～§４）の内容を口頭で要約するとともに、それに対する感想や意見を伝える。 [学習活動] （第２時から第５時の各時に１セクションずつ扱うこととする。） 1　教科書を閉じて本文の音声を２回程度聞き、話題や概要を把握する。 ＜指導上の留意点＞ リスニングにおいては、前時で把握した本文の内容を踏まえ、キーワードとなる語を意識して聞き取るよう指導する。 2　本文を読んで、ワークシート上のSummary Chart（要約を書き込むフローチャート）を完成させる。 3　教師の質問に答えながら、Summary Chart上の記入事項を確認し、本文の内容理解を深める。 4　ペアになって、Summary Chartを見ながら、各セクションの内容を口頭で要約する。その際、次のように、要約の方法を段階的に指導する。 ＜指導上の留意点＞ 生徒が本文の言い換えや要約ができるようにワークシートを工夫する。 [口頭要約の段階的な指導] §１：与えられた質問に答え、答えの英語とつなぎ合わせて要約する。 §２：与えられた複数のキーワードを用いて要約する。 §３及び§４：自分で本文からキーワードを抜き出し、それを用いて要約する。	知・理 表現①	活動の観察及びワークシート 活動の表現

「聞くこと」、「読むこと」を統合的に活用し、概要や要点を的確に把握する活動。

	5　意見や感想を述べたりする表現（He is cool/great/fantastic）や話を続けたりするために必要な表現（because...やWhat do you think?など）を練習する。 6　ワークシートに、各セクションの感想や意見について話すためのキーワードをメモし、そのメモを参考にしながらペアで伝え合う。 ＜指導上の留意点＞ ペアで要約をする際、各セクションを段落ごとに分担したりするなどして、学び合う場面を設定するなど工夫する。	関・意・態	活動の観察及びワークシート
6 ～ 7	・学習した語彙や文法事項等を活用して、地域の街づくりや活性化プランをグループで話し合い、発表の原稿を書いたり、発表の練習をしたりするなど、プレゼンテーションの準備をする。		
8 ～ 9	**プレゼンテーション** ・１グループにつき約10分間、２時間連続で行う。 ・評価規準を明確化し、生徒同士においても他グループを評価する。 ・後日実施する全校のプレゼンテーション大会に代表１グループを推薦する。	表現②	プレゼンテーション

主体的に話し合うことによりプレゼンテーションの内容を高めさせるなど、「アクティブ・ラーニング」の視点から授業の充実を図る。

「話すこと」、「書くこと」を評価

(4) 言語活動の充実に資する指導の実践例

「外国語表現の能力」	評価規準（話すこと・書くこと）	配付資料等を読んで、自分の街の活性化について自分の意見をまとめ、単元で学習した表現を活用して原稿を書き、発表することができる。

○　具体的な指導手順

1　プレゼンテーションの評価の観点を説明する。

教員の評価に加え、生徒同士で相互評価することにより、プレゼンテーションへの参加の意識を高めるとともに、フィードバックに活用する。

（評価シート）

Volume	excellent	good	not so good
Eye Contact	enough	not enough	none
Impression	excellent	good	not so good
Understanding	100%	80%	less than 50%

2　資料を配付し、現状を把握させる。

＜各グループに配付した資料＞

中心市街地の現状　大規模小売店の立地状況　中心市街地の主なイベント
歩行者通行量の推移　観光の状況　交通の状況　住民ニーズ（アンケート調査）

事前に最低限の情報を生徒に与え、その他必要な情報は生徒に調べさせる。

3　原稿の作成

各グループ内で分担し、原稿を作成する。作成した原稿は教師に提出する。

「書くこと」の評価。

4　教室でプレゼンテーションを実施し、代表１グループを全校大会に推薦する。

「話すこと」の評価。

5　プレゼンテーション具体例

プレゼンテーションの発表テーマ（例）
・Before After in Our Town　・Changing Our Town into the Resort Area
・The Night Market Project　・Come on! Our Town!

＜プレゼンテーション例（原稿）＞

Theme：Before After in Our Town

Proposal：　We'll propose to make ″US (Universal Street)″ on Main Street in our town. It will have many kinds of shops and restaurants which satisfy both our elders and us young people. But for our proposal, these shops must have a unique appearance. For example.....

Topic スーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）の取組について
～未来のグローバル・リーダーの育成～

北海道登別明日中等教育学校は、「国際的な対話力」、「課題解決力」、「情報発信力」をグローバル・リーダーとして求められる資質能力として育成するとともに、地域（北海道）や世界の食料問題についての探究型学習に取り組むことにより、経済や環境、地域振興など多面的・多角的な分野・領域から物事を考察する力の育成に取り組んでいる。

ここでは、本校のテレビ会議システムを活用した海外の高等学校との交流活動や本校が独自に実施している「ＡＫＢ　Ｅｎｇｌｉｓｈ　Ｃａｍｐ」の取組について紹介する。

【海外の高等学校との交流活動】

○ね　ら　い：海外の高校生とＩＣＴを用いた交流を行い、互いの国の食料事情等について理解を深める。

○実施内容：事前に食をテーマとした質問事項を生徒に準備させ、会議室に設置されたテレビ会議システムを使って、オーストラリアの高校生と質疑応答を行った。

【交流の様子】

テレビ会議による意見交換

【成　果】

○　生徒は、自分が話した英語が海外の生徒に通じたことや海外の同世代の生徒と共通の話題について理解し合えたことを実感し、学習意欲を向上させることができた。

○　当初は一問一答形式での会話をしていたが、交流が進むにつれ、その場で新たな質問を考え、会話を継続することができるようになった。

【ＡＫＢ　Ｅｎｇｌｉｓｈ　Ｃａｍｐ】

○ねらい：外国人との活動や宿泊生活を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うとともに、農場でのフィールドワークを通して、食や農業について考える。

○日　程：２泊３日

○場　所：ニセコ町民センター、グリーンファーム

○参加者：生徒13名、教員２名、ＡＬＴ１名、北海道大学留学生５名

○内　容：キャンプ期間中は全て英語を使用し、ＡＬＴや留学生との交流を通して異文化理解を図った。また、グループディスカッションや農場でのフィールドワークを通して、有機農業や食の安全についての理解を深め、グループごとに食と農に関するテーマを設定し、プレゼンテーションを行った。

【活動の様子】

プレゼンテーションの準備

【成　果】

○　様々な国からの留学生との交流やディスカッションを通して、「食」や「農業」に対する見方や考え方を広げることができた。

○　ＡＬＴや留学生と英語で交流することにより、英語で会話する意欲や能力が高まるとともに、外国人との接し方や国際的なマナーなどを学ぶことができた。

［参　考］北海道登別明日中等教育学校のホームページ
（http://www.akebi.hokkaido-c.ed.jp/）